

ナイス

3月号
vol. 157



特集

すたすた

⑨ あみなおす時間 ideau(いであう)

「そろそろ限界」
長橋1丁目付近にて撮影

2018年1月からゆ〜とあいは居住支援法人のなかま入り。まちの人の相談の中で「このまちの公営住宅や古い木造住宅をもっと活かさなきゃ。」そんな気持ちがふつつつあふれてくる。ヒントを探しにいろんなところへ、いろんなひとに。

ゆ〜とあ

⑨ あみなおす時間 ideau(いであう)

🏠ありえない当たり前？

正月早々気になる記事を見つけた。1月24日、あるブログで「シングルマザー死ねって日本が言っている」というタイトルの記事(※1)がアップされた。「これはいちシングルマザーの愚痴です。」と始まり「いまの日本では、片親で未就学児を育てる人間に人権はほとんどない。悲しいけどこれ現実なのよね。」で締め括られている。2016年の「保育園落ちた日本死ね!!!」と同じく、世間や政治に向かつて放たれたむき出しの感情や言葉が突き刺さる。

数日後の1月28日には湯浅誠さんが「母子家庭の貧困」をテーマに記事(※2)を書いた。母子世帯の8割が働いているのに、その貧困率は5割を超えている日本は「働いても貧困から抜けられない国」であると指摘し、この実態への関心のなさを「このありえないことを『ありえない』と驚かれない、というありえなさ」と言いあらわした。

🏠時間と空間の貧困

2007年に大阪市が出している生活保護の事業分析報告も見てみよう。少し古い数値になるが、母子世帯の平均勤労収入は月13万5千円に対して生活保護2人世帯は月14万9千730円であり、さらに生活保護には「別途、住宅・医療・教育扶助等あり」とある。安すぎる勤労収入の改善よりも、生活保護基準の見直し優先され、その後、母子加算は減額され続けている。これは「ありえない」。

母子世帯の貧困は経済面だけでなく、時間と空間の貧困を引き起こしている。約20年をかけて母子世帯の居住貧困を研究する葛西リサ(立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科所属 RPD 研究員)さんは言う。母子世帯向けの居住支援には①公営住宅優先入居制度、②母子生活支援施設、③住宅資金・転宅資金貸付の3本柱がある。これに対してそれぞれ①びっくりするほど高い入居倍率、②集団生活を強い

られるほど少ない施設の充足率、③貸与のハードルを上げる保証人の必要などの課題があり、支援の前に立ちはだかる。

こうした公的支援の硬直さを避けて民間の賃貸住宅を借りようにも、幼子を抱えた低所得母子世帯を敬遠する不動産業者は多く、母子世帯はお粗末な物件ばかりを紹介され、狭小な住まい、空間の貧困を余儀なくされる。また、母子世帯が求めているのは住居というハード面だけではない。葛西さんが明らかにした、現住地の選択理由のトップ3「親類知人がいたから」「保育所や子の学校の都合」「仕事の都合」は、ワンオペでも子育てと仕事を両立できるケアやコミュニティの確保を優先させる母親たちの選択を暗示している。

こうしたワンオペ育児(※3)の負担を少しでも軽減しようと、全国各地で母子世帯向けのシェアハウスや公営住宅の活用などが広がっている。今回は大阪市内の空家を改修したシェアハウス「ideau」の入居者であり、運営



会社のスタッフでもある安田委久美さんに現場を案内してもらった。

◆なんとなく安心の立ち位置

ideaは平野区にある2階建て長屋の2棟を改修した「ぐるぐるそだつ ながや」の一角にある。空家が更地になり、駐車場や戸建住宅がどんどん増えていくなか、地域のもやいなおしがしたいと考えていたオーナーが、



シングルマザーシェアハウス（3戸）とファミリーシングルタイプのアパート（3戸）

◆あみなおす時間に

割高家賃でも、ideaが選ばれる理由の1つに、シンママのキャリアアップの応援があるかもしれない。シンママの住まいのニーズは子ども成長に合わせて変わっていく。小学生ぐらいまでならケアやコミュニティが優先されるが、中学生以上になると収入や空間の広さが優先される。こうしたニーズの変化を見越しながら、シェアハウスを利用しつつ、少しでもシンママが自分の時間を確保し、次のステップに進めるよう応援している。代表の越野健さんも将来の仕事やキャリアの相談に乗ったり、起業経験を活かした小商いのノウハウを伝授したり。



以前の柱は残してリノベ。年代物のシールを発見

市内2カ所でシェアハウスを運営するPeace Festaと出会った。そこから、「子どもたちがそだつ。コミュニティがそだつ。」をコンセプトに、2棟の長屋のうち1棟をシングルマザーシェアハウス（3戸／5世帯入居可）とファミリーシングルタイプのアパート（3戸）にした。もう1棟は、1階は食堂で2階は寺子屋のレンタルコミュニティスペースに生まれ変わった。

Peace Festaが運営するシングルマザーシェアハウス「idea」は、共同リビング・ダイニングに各居室、感染症を考慮してトイレと風呂は居室ごとに設置というスタイルで、家賃は月7万円＋各居室の電気・ガス代。各居室の間取りはそれほど広くないので少々割高な感じもするが、「入居時の保証人不要」というシングルマザー（以下「シンママ」）のニーズに応えた設定になっている。好評のようで3部屋が入居中だ。そのうちの1部屋はスタッフの安田さんが入居していて、なんとなくの安心感を与えて

「住まいの提供だけではおもしろくない。ここで暮らして、それぞれが少しでもポジティブに変わるきっかけを掴んでくれたら。」

そんな想いを語る安田さんも実はPeace Festaの社員ではない。業務委託的な関わりで、自分の時間を確保しながらシンママ向けの派遣会社が発立できないかと夢を描いている。今の大変さを和らげることも大切。それにプラスして将来に向き合うための「あみなおすの時間」も大切。そんな取り組みがスタートしていた。

◆必要な時に必要な社会資源

今回は、年々増加するシェアハウスという居住形態の中で、「母子世帯向け」に着目してお話をうかがった。シェアハウスそのものは、その時のライフスタイルに合わせて、同じ入居者と支えあいつつ次のステップアップの準備期間として活用する点に大きなメリットがあると思う。特に母子世帯となると、経済面や子育てで同じ境遇にいる



（右）共有のキッチンスペース。向き合っておしゃべりしながら料理をする時
（左）お風呂とトイレはやっぱり居室ごとがいい

いる。キャラクターのせいかもしれないが、安田さんのこの「なんとなく」が絶妙だ。彼女の立ち位置は「管理人」ではないし、ましてや「支援者」でもない。自らもシンママだ。ideaには厳しい決まりごとや組み込まれた行事といったものはない。でも、同じ視線だからこそ、たまに一緒に料理をつくる時、何気ない会話の中から、みんなだて焼きパーティーや鍋などつながりが生まれているそうだ。

者同士で相談して子育ての協力ができるし、ママ自身の生活や仕事のスキルをあげる時間もつくれる。何より子どもを一人にしない環境がそこにある。他人との生活空間の共有に抵抗のある人もいるだろうが、シングルマザー向けシェアハウスが必要な社会資源の一つであることは間違いない。

機会があれば、Peace Festaが運営する若者の支援付きやLGBT向けなど様々なシェアハウスも訪れて学んでみたい。

文責：西田吉志・田岡秀朋

.....

※1: misoyorishina's diary (2020/01/24) 「シングルマザー死ぬって日本が言っている」 <https://misoyorishina.hatenablog.com/entry/2020/01/24/064300>

※2: 湯浅誠「事実は小説より奇なり 母子家庭の貧困」 <https://news.yahoo.co.jp/bv/line/yuasamakoto/20200128-00160534/>

※3: 「ワンオペ育児」ワンオペとは one operation を略語で、外食チェーンなどで一人の従業員が店内のすべての作業をこなす状況を指す和製英語。両親のどちらか一方だけに育児の負担がかかっている状況をこのように表すことが多い。





1970年代という時間は、私にとって記号的、暗示的意味のある特別な歴史だったと記憶する。みずからの無知を知らされ、社会への関心を強いられ、なによりみずからに微塵の力もないことを知らされた“時たち”の連続であったからだ。70年代という時が変幻し、遙かな遠い現在のこの地に漂着してしまっただけの今、ごく私的なその記憶の断片をかき集め、私がいた70年代を確認してみたいと考えた。

くらし応援室/楽塾: 佐々木敏明

1971年 沖縄



沖縄まで

60年代の終わり、私は西區京町堀にあった広告制作のO社に入社した。当時O社は吹田市千里で行われる「大阪万国博覧会」のカナダ館プロジェクトに関わっていて多忙な状態だった。まだ雑草だけが延々と遠くまで見渡す未開の千里丘陵に行き、近い将来この地にパビリオンが建設されるという現場を調査に行ったりもした。

社内はデザイン部、コピーライター部、写真撮影部の三制作室に分かれ、電通など大手広告代理店から発注される新聞媒体や、SP(販促)広告を制作、私はデザイン部に属し、主にSP部門の編集誌やイラスト制作を担当していた。所属するデザイン部のチーフは、京都の前衛美術家で、部内で芸術論争が日常化し、私自身も「The PLAY」という美術集団に関わり始めていた。

コピー部には、当時「反安保・ベトナム戦争反対、大学授業料値上



げ闘争」などのスローガンを掲げ、全共闘各派で活動していた各大学の落ちこぼれ学生たちがライターとして入社していて、「マスコミの宣伝活動は企業資本の手先、体制のチヨウチン持ち」などと、宣伝世界の神兵である自らを嘲笑していた。私は関西ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)という組織で御堂筋などをデモツていて、コピー部に割り込んではいないで、イベントに参加していた。

写真部にはベ平連のN君がいた。彼は著名だった写真大賞を受賞した矢先で、その作品のモデルはデザ

イン部の美形同僚で、男性ヌードを被写体としていた。当時の男性ヌードは衝撃で、私たちが彼の受賞を喜び、ついでに私もヌードになって撮ってもらった。N君とは沖縄への関心が共通し、71年4月、米統治だった沖縄渡航にバスポートをとり、関西汽船の船中泊で那覇へ向かった。

抵抗の季節

ここで簡単に60年代後半からの日本及び周辺各国の背景を簡単に記しておきたい。日米安保条約の自動延長に反対する「反安保闘争」は、沖縄の嘉手納空軍基地から飛び立つアメリカの「北ベトナム爆撃」への非難や、新東京国際空港建設に反対する「三里塚闘争」などに加え、万国博反対や早稲田・東大をはじめ各大学の学費値上げ闘争などにも火が付き、「国際反戦デー」などとも合流しながら、学生、労働組合によるストライキが継続していた。

66年、中国では文化大革命が始



まり毛沢東思想への忠誠から「紅衛兵運動」が勃発し、権力闘争に発展。68年の米国では「黒人解放運動」のリーダーであるキング牧師が白人に暗殺され、仏では大学制度改革を叫ぶ学生や労働者たちが、大規模なゼネストを繰り広げ「パリ五月革命(カルチュエラタン)」を戦っ

ていた。日本の学生活動家たちが「東京にカルチュエラタンを！」などと物真似スローガンをデモスタイルに火炎瓶を投げていて、私は「なにがカルチュエヤ、イモドモが」などと馬鹿にしていた。またチェコでは東欧五か国及びソ連軍が軍事介入(「プラハ制圧」)し、社会主義改

革派を強硬に弾圧。東京の府中市の「三億円強奪事件」はこの年12月だった。

そして69年初頭、わが国沖縄では「生命を守る県民共闘会議」が、ベトナム爆撃のB29型戦闘機の撤去要求をする沖縄ゼネストとして反安保闘争と連動。国内外、あるいは私の身边には得体のしれない恐怖感や不安感、それに緊迫感が漂い、しかし同時に不思議なほどの希望と高揚感がないまぜとなつて存在していた。

70年11月25日に三島由紀夫が自死。この日の出来事は、自分の制作机上のトランジスタラジオからのニュースであった(三島事件は次回で記述する)。

沖縄、71年のリアル

71年の沖縄行の動機である。中学か高校生の頃、学内図書館で見た沖縄に関するモノクロームの写真集に、軍用ジープでひき殺された女の子の写真が一葉あった。少女は



【田岡秀朋】アンパンマンのお面をかぶり、『なび』56号の表紙に登場した長男が小学校を卒業する。ちょうど100号が経過していた。あつという間だ。



【佐々木敏明】初案つくる魔女らが跳躍す初もうで名を借りつどう閑談会(え)恋猫やわが盤上のロマンチック



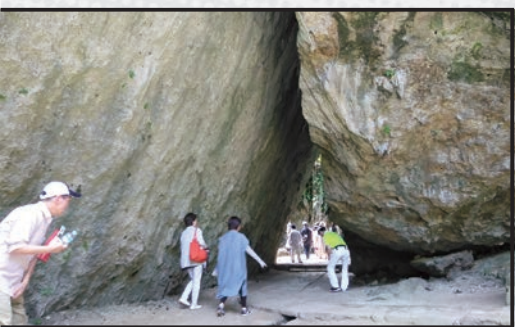
【沖田一志】リビング照明のリモコンが不調。交換品よりも安価だったのでスマートリモコンを購入した。リモコン式の家電を何でもスマホで操作できるが、スマートリモコン操作の学習が必要。



国道の真ん中であおむけに倒れ、米兵たちがその死骸を見守っている。少女の口からは一筋の血痕が見えた。日米地位協定によりそのひき逃げ米兵は逮捕されないとあとで知り、怒りはその後すつとその写真と共にあり、沖縄行はその写真が道連れだった。沖縄をカメラに収めたいというN君の思いも怒りだった。国内での沖縄返還闘争は激しく続いており(米国からの返還は、

私たちが沖縄から帰った翌年の72年まで待たなければならなかった、私たちの旅は万博が終わり、世間が熱狂から平熱に戻りつつあった頃である。蛇足ながら、私は万博を一度も体験することはなかった。沖縄での滞在はたかだか3、4日ほどだったと記憶する。当時、国際通りは戦後大阪の闇市みたく、粗末な平屋が雑然と並び、現在の国際通りからはとても想像のつかない様子だった。首里城が米軍に破壊されたという情報もなく、また復元もされていなかった時代だ。沖縄ではN君とは別行動で、その日は私は嘉手納空軍基地周辺にいた。次の文章は本誌116号(2016年10月)の特集「いくさの軌憶 沖縄編①」いつまで長い夏がつづくのかに記した私の体験記述の一部である。

「沖縄返還の直前、パスポートを取り沖縄へ渡航して以来40数年が経つ。滞在中のある日、米軍基地の周辺で大きな爆発音に続き激震が



起こった。黒煙が立ち空を暗くした。飛来した土石を浴び何が起きたのか、私は恐怖でその場を急ぎ脱出した。それが米軍の砲撃演習とあとで知る。当時20代の私が暮らす地とは異なる沖縄一をこの時、体験したのだった。

本当に怖かった。書籍やイデオロギーだけで沖縄を知ったつもりになっていた自分に、沖縄は巨大なスケールで仮想戦争を見せつけた。無頓着にも怖さの一つも知らなかった自分が、本当の怖さを知らされた瞬間だった。あの時、砲弾の一部

や飛び散った岩塊に被弾していた自分であったなら、今の安穩を続けられていたかどうかわからない。しかし沖縄は、日常がこの現実にあると気がついた沖縄の旅だった。変わらぬ米国統治と基地偏重明治維新を踏襲した琉球処分的政策、何よりも私たちの無関心と無慈悲がより沖縄を孤立させた。1972年の沖縄復帰を記念して首里城の復元が想定され、2019年1月に復元の最終完成を見た。

私たちの運営する大人の塾「塾塾」は19年5月、「琉球の旅」を実現し首里城も入城してきた。その首里城が10月末炎上。これは沖縄歴史の復讐であり、ヤマト心が届かぬ火炎の涙であり、そしてその寓意に相違ない。私の1971年の沖縄への旅は、自らの大いなる無知を知らしめたハードコアな旅でもあったと思っっている。

~~~~~  
見聞きイラスト  
「沈みゆく守礼の国」/hidarimaki

## 今月のお隣さん

孤立をおそれず、紙面をこなげる地域の輪



### 松井 正通 (まつい まさみち) さん

「ゆ〜とあい」3Fの「GCC kidsインターナショナルスクール」でPE (physical education=体育)の講師をしています。

趣味はチャリンコ。小学生の頃に流行したサイクリングを始めたことがきっかけで、高校時代はチャリンコ旅行三昧でした。30年前にロードレース(自転車競技)を始め、そしてなんと昨年12月に愛媛県内子町五十崎で開催された「第25回シクロクロス全日本選手権大会 マスターズ部」(10km)で優勝!! タイムは32分19秒でした。

目的や目標をもって費やす時間は無駄にはならない! ロードレースに興味のある方、いつでも声かけてください!

## 6月 2日 火曜

ハナレバナレになった人とまち。 ぐらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

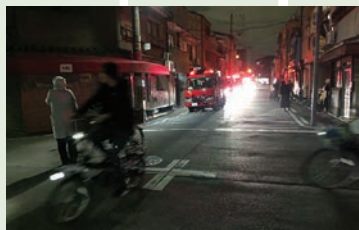
### ひのようじん

まだまだ寒さの残る年度末「火の用心」。木造建物の密集するまちは情緒がある一方で、小さな火種がまちを呑みこむ大火に化ける恐れもあり。まちを守るのは一人ひとりの心掛け。

寒空の夜に2つの火災を目撃。物凄い数の消防車・消防隊そして近隣住民が集まり、辺りは騒然。こんな火災時に大切なのは「気付けるか・逃げられるか・拡大させない」である。火災報知器は発生前の煙を感知するので、警報にすぐ気づけば初期消火に間に合うかもしれない。

報知器や家族の呼び掛けで火災に気付いたあとは、避難路の確認が大切。2方向以上が確保されているか、建物の避難器具はちゃんと使えるか。そして、被害の拡大を防ぐ消防隊の消火活動の通路は確保されているか。消火活動の妨げにならないよう、野次馬ついでに隣近所への声掛けも心掛けたいものだ。

何ごとも器械ばかりに任せず、まずは日頃の「日」の用心」が大切だと感じた夜。



辺り一帯騒然となる夜の一幕



【安田拓也】人の一番のストレスは「人間関係」という。人が文明を発展させ効率化し、個として自立を目指すのは、ストレスから解放されたい生物としての本能? 群れはもういらない?



【西田吉志】ゲストハウスにシェアハウスと地域の資源を活用して新しい取り組みを進めている。いつもやけど走りながら考えてやっていくスタイル。そこにやりがいを見つけながら間もなくスタート。



【寺島史視】3月に入り、春という季節がやってくる。春のイメージは涼しくなっていくイメージだが、2月のときでも急な気温の変化があり、3月はどうなるのかな? 天気予報をチェック。



【谷口円】誰かにアドバイスを求められた時、優しい言葉と厳しい言葉の、どちらが親切なのだろうと迷います。でも「無責任な優しさ」と、「愛のない厳しさ」は良くないよな、というのが今の結論。

# 葉っぱの吐見

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとお喋りを聞いてください。



## 「菜の花の葉っぱ」の巻

僕は生まれたときからゴツゴツした葉っぱの持ち主。ニックネームはゴジラっていうんだ。だけど口から火は吹かないから安心して。

僕の頭には白や黄色の小さな花が咲くんだよ。僕は仲間たちと花のじゅうたんをつくるのが役目なんだ。

僕ってゴツゴツした葉っぱ。

だからみんなに怖がられるんだけど怖がらないでほしい。

あたたかい春のように優しい心の持ち主なんだ。

赤井まゆみ

### 菜の花のこと

アブラナ科アブラナ属の花の総称。葉っぱの違いでたくさん種類がある。花言葉は「小さな幸せ」「元氣いっぱい」



# い湯かげん

## 「豪華客船」での人権侵害事態

月一回発行の『なび』で時事モノを書くのは不似合いたが、備忘録のつもりで2月10日時点の新型ウィルス事件について書き置きたい。

実は、乗客に感染者が出たことを理由に横浜港に停泊している「豪華客船」ダイヤモンド・プリンセス号には古くからの友人が乗船している。正直言つて、ボクも事件当初は傍観者だったから偉そうなことは言えない。しかし、友人と毎日交信するうちに、事件がとんでもない人権侵害事態まで引き起こしていると感じた。間接的ではあるが、やっぱ現場が発端点だ。

2月1日、客船は沖繩に寄港して出入国手続きも検疫も終え、横浜港まで「国内移動」のはずだったが、3

日に横浜港に着岸するや入港を拒否され、海上に強制停泊させられた。法的な根拠は何もないのだから、非常事態への乗員乗客の協力を求めるべきだったが、何の説明もなかった。加藤厚労相は二週間程度の拘束と発表したけど検査は遅々として進まない。その間、乗客も乗員も保衛の可能性があるので、船外からの応援もありません。サービスは続けられ、次々と感染者が増えていった矢先、今日(2月10日)の報道で感染者が一気に倍の135名になった。すでに2次感染が広まっているのだらう。国の不作為が乗客や乗員の人権を侵害している構図で、彼ら3700人の下船、解放はいつになるやら、事態は混迷を深めている。

友人の言葉から感じ取れる怒りは、国の人権侵害に向けられているにちがいない。

ボクは、ハンセン病が、誤判と偏見に基づく国家による強制隔離を是正するのに百年の時を費やす人権侵害だったことを思い起こした。今回は緊急事態で、法だけでは即座には対応できなかったのかもしれない。が、いったん沖繩で入国を認め、2日後に横浜で取り消す法的根拠などどこにもない。他方で、政府は、船上だから災害対策法は適用されないとい頑な姿勢を崩さない。一両日ほどの短期停泊ならまだしも、見通しのない船内隔離はどう考えても法律違反だ。

また、本来なら感染拡大を避けるために、感染・保菌率の高い乗員に代わって新たに別の支援要員を出動させるべきだが、自衛隊は医務官だけの派遣に止まったまま。さらに、3700人という大人数に対応するために陸地への分散隔離に協力してもらわなければならないのか、大阪も含めて寄港地の受け入れの話はまったくない。

# 皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



(寺本良弘)

今年は年明けから中東や東アジアの政治問題が大変だと思っていたが、ここにきて新型コロナウイルスによる肺炎で世界中が感染防止に躍りになっている。人の動きが止まると経済活動にも大きな影響を及ぼすことだろう。

そんな中、名古屋で行き場をなくした高齢者を公園に置き去りにするという事件が起こった。理由は様々あるだろうが、病院に救急搬送できなかったことが大きいと思う。病院も無料宿泊所も受け入れ拒否ではどうすればいいのか？ これらの事件を見ていると行政の危機管理、つまり人を大切にする行政の仕組みが機能不全になっているように思う。今一度考える必要があるのではないだろうか？

我々は「断らない相談」活動を実践していこうと思う。

友人は、乗員1200人の大半はアジア諸国での現地採用の臨時職員だということ、そして船が「豪華客船」とばかり喧伝されていたこと、そうしたことが偏見を助長しているのではないかと気がついた。こうして、新型コロナウイルス事件は、「豪華客船人権侵害事態」も伴った大事件に発展しようとしている。

あらためて日本は人権に疎いと感じた。国民に人権の尊重を教育啓発するのは重要だが、人権は第一義的には、権力者、権限を持つ地位にある者に課せられる義務であるべきだと痛感した。さて、これから、日本はいかに動くのか、友のためになす術のないボクは、見守るしかないのか。



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[山村裕太] 居酒屋にいったとき際「ハイボールW(ダブル)」というメニューを「ハイボールわらい」と読んでしまいました。少レネットを控えようと思いました。



[若松司] そういえばバレンタインデー。中高生の頃はありもしない可能性にドキドキしていたが、今は風のように穏やか。もうすぐ「チョコレート・ディスコ」が聴けるはず、ワクワク。



地域の縁を心でつなぐ

# 心の時間



が生じます。加島さんは「求めないですむことは求めない」ことで悩みを減らす道を説かれました。

また、山中伸弥先生の座右の銘としても有名な故事「人間万事塞翁が馬」は「幸せだと思っていたことが不幸の原因になったり、災難と思っていたことが幸せの原因になることがある」という意味で、目先のことだけで悩む必要がないことを教えられます。

私たちは何のために生まれてきたのでしょうか？

ただまさしさん作詞の歌「いのちの理由」に答えの一つがあります。すなわち「しあわせになるために、誰もが生まれてきた」です。そして周りの人を幸せにすることが、私の大切なことです。

松向寺 通法

ある若者から「職場の人間関係に悩んでいる」と打ち明けられました。ただ、「木を見て森を見ず」と言うように、この若者はささいな人間関係(木)にとらわれ、大切なこと(森)が見えなくなっているようです。

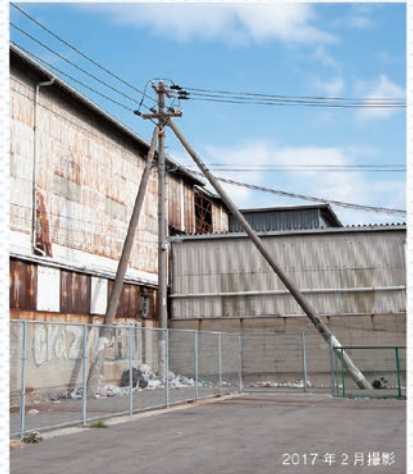
加島祥造さんの著書『求めない』によると、「求める」には向上心という意味もあって大切ですが、何かを「求める」と悩み

## ココドコ

ココはドコ？  
わたしはゆ〜あい？  
編集者が間違えた  
「にしなり100景」  
大公開！

電柱がものすごく支えられています。1本で支えているのは見かけますが、2本で支えているのは珍しいのでは？ココがドコかわかった人は、ゆ〜とあいの受付まで！正解者にはドリンク無料チケットをプレゼントいたします（先着10名様限り）。回答期限は3月末日、ふるってご回答ください！

【先月号の答え】 西成区聖天下1丁目、阪堺電車の松田駅近くでした！  
印象的な風景なので見たことある人も多かったのでは。



2017年2月撮影



## ゆ〜とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび3月号(vol.157)  
発行日:2020年3月1日(創刊日:2007年1月1日)  
発行:株式会社ナイス  
住所:大阪市西成区長橋3-6-33  
電話:06-6563-1156  
E-mail:info@nice.ne.jp  
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長:若松司  
編集:沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、  
寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太(あ  
いうえお順)  
イラスト:hidarimaki デザイン:谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

